

【研究ノート】

植民地監獄における正義の語り： 旅順監獄博物館の事例から

高山 陽子

はじめに

旅順監獄は、ハルビン駅で伊藤博文を殺害した安重根（1879-1910）が処刑された場所としても知られる。数回の改修工事を経て、愛国主義教育基地となった旅順監獄博物館は、中国人観光客だけではなく多くの韓国人観光客も訪れる旅順の観光名所の一つである。使用されなくなった監獄（刑務所）が博物館として一般公開されるのは、アルカトラズ島やロベン島などのように、多くの国や地域で見られる。日本では博物館網走監獄〔写真1〕が1983年に開館し、その立地条件にもかかわらず2008年には入場者数が1000万人を超えた。

このように老朽化による閉鎖後、文化財として監獄が保存される例が増えているが、その理由は一様ではない。監獄が保存・展示される理由を以下の4点から指摘したい。

第一は、近代遺産として建物を保存することである。日本では1872年、最初の監獄法「監獄則並図式」の交付後、近代監獄として集治監が建設された。集治監から監獄へ名称が変更され、五大



写真1 博物館網走監獄



写真2 旧金沢監獄正門

監獄（奈良・千葉・鹿児島・長崎・金沢）の建設が始まった。その設計者である山下啓次郎（1886-1931）は、帝国大学工科大学で辰野金吾（1854-1919）に建築を学んだ後、1901年に監獄建築視察のため欧米に渡り、帰国後、五大監獄の設計に取り掛かる。当時の

最高水準の技術を以て作られた五大監獄のうち、金沢監獄正門〔写真2〕は国登録有形文化財であり、日本の近代を象徴する重要な建造物である。

第二は、収監制度の歴史の展示である。フーコーは『監獄の誕生 監視と処罰』において、パノプティコンという監視空間に身を置いた囚人は常に監視されていると感じるようになり、次第に監視がいる、いないに関わらず、自身の行動を律するという規範が生まれると指摘した〔フーコー 1977〕。前近代の日本の牢屋は、刑務執行のための刑務所（既決監）ではなく、拘置所（未決監）であり、不衛生で残虐行為の罷り通る施設であった。不平等条約改正を目指した明治政府は近代的な収監施設としての監獄を設置すると同時に、拷問による自白も原則的に廃止した。それでも収容者は人権が十分に保護されたわけではなく安価な労働力として炭鉱などの過酷な環境で働かされた。監獄博物館はこうした収監制度の変遷を展示する施設という側面を持つ。

第三は、監獄における矯正教育の展示である。日本では被収容者の矯正教育を司る内務省監獄局は1879年に成立し、1952年に現在の矯正局となった。矯正局は矯正施設（刑務所・少年刑務所・拘置所・少年院・少年鑑別所・婦人補導院）において被収容者に対して作業や教育、医療などの処遇が適正に行われているかを監督している。監獄博物館は、矯正教育の中で制作された工芸品や美術品などを通して更生プログラムの成果を示す。

第四の独立・革命運動の歴史の展示は、主にポスト植民地諸国で見られ

〔表1〕 東アジアにおける主な植民地監獄博物館

国・地域	監獄名	設置年	設置国	現在
韓国	京城監獄	1908	日本	西大門刑務所歴史館
中国	青島監獄	1900	ドイツ	德国監獄旧址博物館
	旅順監獄	1902	ロシア・日本	旅順日俄監獄博物館
	提藍橋監獄	1903	イギリス	上海監獄陳列館
	撫順典獄	1936	日本	撫順戦犯管理所旧址
台湾	嘉義監獄	1922	日本	獄政博物館
香港	ヴィクトリア監獄	1841	イギリス	大館
	スタンレー監獄	1937	イギリス	香港懲教博物館
ベトナム	コンダオ監獄	1861	フランス	コンダオ博物館
	ホアロー監獄	1896	フランス	ホアロー収容所博物館
	フーコック監獄	1953	フランス	フーコック監獄

る。現在、東アジア諸国において植民地監獄博物館として一般公開されている主要なものは〔表1〕の通りである。租界や租借地、植民地に建設された青島監獄〔写真3〕や嘉義監獄〔写真4〕、京城監獄〔写真5〕のような西洋式監獄は列強の植民地支配の象徴でもあった。アルカトラズ島のような刑法犯を収容した監獄と異なり、植民地監獄博物館は列強支配に屈しなかったという正義を物語る装置でもある。

政治犯収容施設としての植民地監獄博物館はアジアの近現代史を考える上



写真3 旧青島監獄



写真4 旧嘉義監獄



写真5 旧西大門刑務所

で重要な空間であるが、その保存と展示については注目されてこなかった。アウシュヴィッツなどの強制収容所に関する研究〔加藤 2012; Dalton 2015〕やダークツーリズムとしての監獄ツアーの研究〔Wilson 2008; 井出 2018〕も蓄積されてきたものの、植民地統治下における政治犯収容という負の記

憶が現代の観光産業と如何に並存するかという視点からの研究は行われていない。そこで本稿では、1971年に一般公開された旅順監獄博物館（旅順日俄監獄博物館）を取り上げ、監獄博物館の展示について正義という言葉の切り口に分析を試みる。

1. 旅順監獄の設立

1895年、台湾に設置して以来、日本は朝鮮半島、中国東北部、樺太に監獄を設置してきた〔表2〕。多くの監獄がある中で、旅順監獄は規模が大きく、また植民地監獄の特徴を残す博物館として現存する施設の一つである。

旅順監獄はロシアによって建設が始められた。三国干渉で日本から遼東半島を清に返還させたロシアは、1896年の「露清密約」と1898年の「中俄旅大租地条約」の締結を経て、港湾都市・大連の建設計画に着手した。直径200mの大広場（現、中山広場）を中心として、北側に官庁街、東側に大連港、西側に中国人街を置くという計画に基づいて、街路と広場の建設が終了した頃に日露戦争が勃発した。

日露戦争の最中、日本は占領した遼東半島を統治するため大連軍政署や旅順軍政署、金州軍政署を設置し軍政を敷いたが、終戦後、占領地を管理する機関として関東総督府を開設し民政へ転換した。関東都督府の下に都督官

〔表 2〕 植民地監獄（刑務所）設置都市

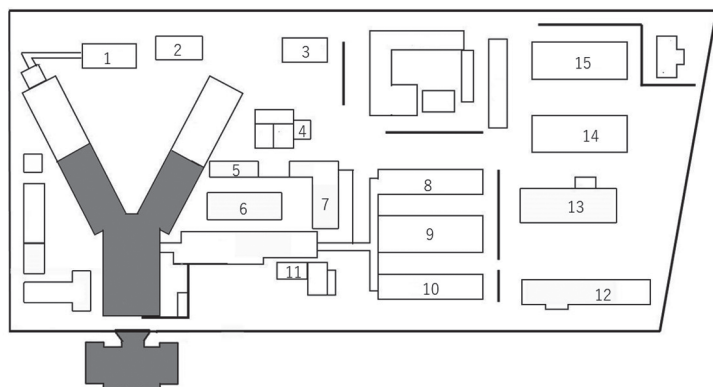
地域		設置都市	戦後の管轄
朝鮮半島		清津、平壤、元山、鎮南浦、新義州、海州、瑞興、金山浦、開城	ソ連
		京城、西大門、仁川、清州、金泉、公州、太田、咸興、大邱、釜山、光州、木浦、全州、馬山、晋州、小廉島	アメリカ
中国 東北部	関東州	旅順、大連、金州	中華民国 のち中華人民 共和国
	満州	奉天、新京、吉林、龍江、拝泉、洮南、呼蘭、延吉、安東、撫順、遼陽、營口、復州、鉄嶺、遼源、昌図、西安、海龍、興京、錦州、承德	
台湾		台北、宜蘭、花蓮、新竹、台中、彰化、林圯埔、台南、嘉義、高雄	中華民国
樺太		豊原、真岡	ソ連

重松一義 1985『日本の監獄史』雄山閣出版より作成

房、民政部、陸軍部を置き、三区分した関東州にそれぞれ民政署を置いた。1906 年 9 月 1 日、旅順に行政を担当する民政部と軍事を担当する陸軍部からなる関東都督府が設けられた。関東都督府官房並民政部分課規程に基づいて、民政部の中に設けられた監獄署内に獄務係、警守係、経理係、医務係が置かれた。1908 年 10 月、民政署は三区から二区に改編され、監獄署は関東都督の直属機関となった。

敷地 26 万 m²の旅順監獄は、放射状に広がる西監房・東監房・中監房と暗牢、病房、絞首刑室、工場から成る〔図 1〕。ロシアが建設したのは〔図 1〕のグレーの箇所、庁舎、西監房・中監房、密室 4 室である。それを引き継いだ関東都督府は 1907 年に工程を終了し、正式に使用を開始した。ロシアが青レンガで建設したのに対して日本は赤レンガで監房を増築した。1 階と 2 階の雑居房には通常の政治犯が 8 人程度、収容され、3 階の独居房には重

[図1] 旅順監獄工場（旅順監獄博物館展示プレートより筆者作成）



い政治犯が収容された。居房の広さは11～14㎡で、東監房には87房、西監房には82房、中監房には84房が設置され、最大で2000名程度が収容された。

工場は15の建物があり、その内訳は以下の通りである[図1]。第1・2工場（軍用手袋）、第3工場（軍用被服）、第4工場（鉄工）、第5・6工場（軍用靴下）、第7工場（木工）、第8工場（軍服）、第9工場（紡績）、第10工場（織布）、第11工場（洗濯）、第12工場（靴）、第13工場（印刷）、第14工場（機械）、第15工場（被服）。第11工場は1907年から1933年まで処刑場として使われていた。1923年の「関東州監獄令実施規則」では、工場における囚人の一日の作業時間が、1月・12月が6時間半、2月・11月が7時間半、3月・10月が8時間半、4月が9時間半、9月が9時間、5月・8月が10時間、6月・7月が10時間半と定められた。

1936年に刊行された『関東局施政30年史』には第7章第2節の「刑務」において旅順監獄（刑務所）の現況が以下のように記されている。

刑務所は高等法院及び地方法院の判決に係る受刑者の刑を執行すると同時に繋属中の刑事被告人を拘禁するのが目的であるが、明治45年以降は満

洲に於ける帝国領事裁判に於いて判決した3箇月以上の懲役または禁錮囚の刑の執行囑託を受くることとなった。(略)

衛生施設に就いては絶えず深甚の注意を払い、常に病者の医療及び伝染病の侵入防止に備えるは勿論、健康保全に就いても、食物の選定と規律的運動の励行を図り出所後に於ける活動に備えているので、監獄設置以来未だ伝染病の侵入を見ざるのみならず、支那人に多い疥癬の如き皮膚病及びトラホームの如き伝染病は入所中極力治療を加える結果、却って全癒して出所する実況である。現在主食物としては日本人には米粟混炊飯を給し其の食費一日平均13銭6厘余、支那人には高粱粟の混炊飯を給し其の食費一日平均11銭内外である。

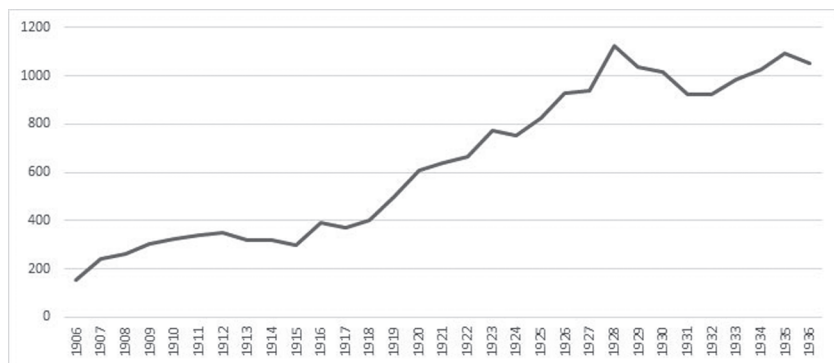
作業は監獄創始時代には諸般の整備不完全で、又地方工業も幼稚なりし為監獄作業を希望する者少なく、僅かに居房作業として監獄作業用の草鞋製作及び建築用煉瓦の製造を主たる作業としたが、明治41年始めて指物工、桶工及び畳工の三作業を起し、又一面監獄周囲の荒蕪地を開墾して監獄需要の蔬菜を耕作せしめている。又同年洋服裁縫工、抄紙工及び靴工の三作業を開始し、更に大正3年紀柳工の作業を起し、何れも良好の成績を収めている。(略)

現在の作業種別は煉瓦工、指物工、洋裁洋縫工、鞆工、漆工、杞柳工、封筒工、印刷工、手袋工、経師工、抄紙工、金銀細工、靴工、靴下工、洋洗濯工、藁工、鍛冶工、鋳力公、網工、桶工、機織工である。

[関東局編 1974：251-253] (現代仮名遣いに改めた)

[グラフ1] は1906年から1936年までの収容者数の変遷を示したものである。1912年と1927年は、それぞれ明治天皇崩御、大正天皇崩御により大赦令が公布された。劉樹富は1926年2月に「経済犯」として逮捕されたが、1927年4月12日に大赦にて出獄した。彼は1972年5月25日の調査において以下のように語っている。

[グラフ 1] 旅順監獄収容者数 (『旅順日俄監獄実録』より作成)



旅順監獄では私は4舎7号の監房にいて、582番と呼ばれていた。当時私の監房に収容されていた7名は全員が山東人であった。王本国と呼ばれた人もいたが、今はもう死んでいる。また于貴族という者もいたが、今どこにいるか知らない。監房内では壁側を向いて互いに背を向けて座らなければならなかった。監房には木製のバケツと便器があり、就寝時に寝ていないとバケツを抱えて起きるように言われる。うまく抱えていないと翌日の作務の前に看守にトウのつるで猛打された後、いつものように作務に行く。

監獄内の食事は7等で、高粱米の団子を食べていた。ある者は受刑後に食事も与えられず、ある人は十分な食事を与えられなかった。食事を与えられなかった者に食事を分けた場合、二人とも罰せられ、さらに一日分の食事が減らされた。(略)

監獄内で殺害された人の死体が水路を塞いでしまったので、その死体を担いで東山の墓地に埋葬した。死体を運ぶことや地面を掘るようなことは、すでにやったことがあった。あるときは数日も死体を墓地に運び、あるときには一日で二人の死体を…。

私は旅順監獄で1年2か月過ごし、昭和2(1927)年4月12日、「大赦」で出獄した。

[旅順日俄監獄実録 2003: 300-301]

ここでは、『関東局施政 30 年史』において記された規律正しい監獄の様子とは異なり、看守による虐待や死体の多さなどが述べられている。1936 年以降の日本側の記録は公開されていないが、1940 年代入ると政治犯の収容が増える。その背景には、1936 年の日独防共協定締結後、1938 年、「関東州思想犯保護観察令」、「関東保護観察審査会官制」の公布により共産主義者への取締りが強化されたことがある。こうして収容された政治犯は 1945 年 8 月の終戦まで 700 名ほどが処刑されたとされる。

2. 監獄から監獄博物館へ

終戦後、解体された旅順監獄は 1971 年に修復工事を経て一般公開された。公開箇所は次第に拡大し、現在ではかつての大部分の工場が展示施設として用いられている。[図 2] のように、一般的に監獄博物館では、参観ルートが決められているか、ガイド付きで参観することが多い。

旅順監獄博物館の展示室の入口はかつての検身室である [写真 6]。東監房、暗牢、西監房を通過して外に出ると、第 1 工場に続く [写真 7]。15 の工

[図 2] 旅順監獄博物館参観ルート (旅順監獄博物館展示プレートより筆者作成)

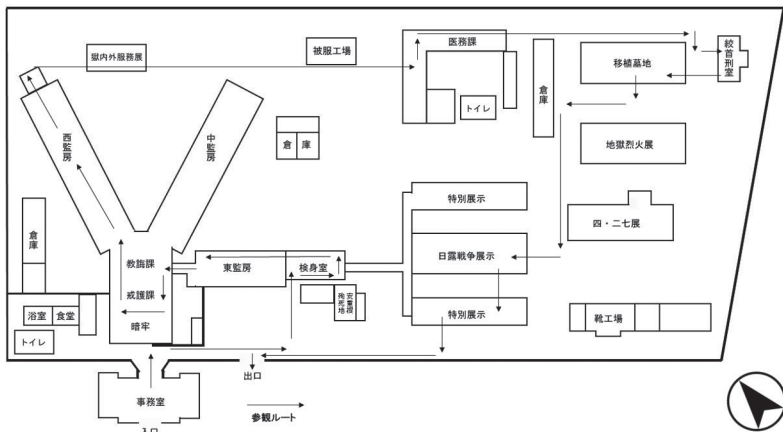




写真6 旧検身室



写真7 旧第1工場

場のうち現在では7つの建物が展示室として用いられている。東の角にある絞首刑室を出ると旧第15工場が移植墓地の展示室となっている。そこには死体を入れた桶を運ぶ収容者とそれを監視する看守のマネキンが置かれている〔写真8〕。福紡ストライキや大連地下党、抗日放火団に関する展示、日露戦争の展示室などが続き〔写真9〕、最後は安重根が処刑されたかつての処刑所（第11工場）で終わる〔写真10〕。

福紡ストライキとは、1926年4月27日、党大連市委員会の指導の下で行われた大連の在華紡（日系資本による紡績業）満州福紡（1923年設立）のストライキである。上海で1925年に起こったストライキの影響を受けたものである。



写真8 移植墓地



写真9 旧第4工場

在華紡は1902年開業の上海紡績や1901年創業の内外綿、1918年創業の日華紡織のように上海、青島、天津を拠点とした。1925年、上海で内外綿の労働者が待遇改善を求めてストライキを起こすと、日華紡織などのその他の在華紡にもその動きが波及し、ストライキ参加者が4万人にのぼった。



写真10 安重根処刑所

一時は収束したものの、共産党の下部組織として工会（労働組織）が整備されると5月に運動が再燃したため、在華紡は徹底して弾圧し、従業員を射殺した。学生を中心とした抗議運動は反帝国主義運動に拡大し、5月30日、打倒帝国主義と経済絶交を掲げたデモ行進が行われた。デモ隊に向かってイギリス警察が発砲し、13名が死亡し、数十名が逮捕された。「五卅烈士」と呼ばれた犠牲者は追悼会で大々的に祀られた[高山2014]。

大連・旅順の労働運動は、1923年12月、共産党下部組織の大連中華工会の創設が嚆矢となる。1924年、社会主義青年団特別支部と中共旅大党組織が大連に作られる。東北労働者運動の中心地となった大連では1926年4月27日、党大連市委員会の指導の下、中華工会がストライキを実施した。

1926年に組織された大連地下党は、1927年から1937年の間、大連地下党は4度の取締りを受け、多くの党員が逮捕・投獄された。1955年の旅順監獄調査では3538枚の収容者の写真が見つかり、そのうちの1182名が政治犯であったという。

1927年7月24日、大連地下党員・胡杰三によって、西沙河口の貯水池にて会議開催という情報が漏らされたことで大連地下党委員書記・鄭和高や連絡員・丁文礼ら49名が逮捕された。二度目の取締りは1928年4月29日で5月1日のメーデーを前にして共産党関東委員会が反日を掲げたピラを印刷していたところ、植民地当局に見つかり、関東委員会書記・曲文秀ら47名

が逮捕された。

抗日放火団とは1934年から1940年の間、78回の放火・爆破事件を起こした組織である。最多は大連の57回で、以下、天津10回、青島3回、鉄道爆破8回と続く。指導者の紀守先(1910-1942)は吉林省伊通県の貧しい家に生まれ、柳条湖事変(九一八事変)以後、抗日運動に身を投じる。1933年、共産黨員となるとソ連の指導を受けた北満国際情報組の工作員として活動を始め、1934年にモスクワに留学した。1934年、大連抗日放火団を設立した紀守先は、放火・爆破活動の工作員を訓練し、大連甘井子工場区の日本の重要な軍需工場・満洲石油の倉庫や関東軍陸軍倉庫などを破壊の目標とした。1935年6月25日夜、抗日放火団は大連甘井子の満洲石油を放火し、推計2500円(現500万円相当)の被害を与えたという。さらに7月13日の関東軍大連倉庫の火事は61,000円(現、1億以上)の損失を与えたとされる。

1940年6月、抗日放火団員の約100名が一斉検挙され、そのうち12名が死刑判決を受けた。1942年12月9日に5名、10日に4名が処刑され、残り3名は旅順監獄で死去した。1942年8月15日、上海租界で逮捕された後、旅順監獄へ収監された紀守先は2つの「満江紅」を残した。

旅順監獄に限らず中国における愛国主義教育基地では、外国の侵略という屈辱とその屈辱を晴らした中国共産党の正義を物語る。一般的には、愛国主義教育基地では、アヘン戦争以降の西洋列強の侵略の歴史から始まる。「腐敗した中国」は外国列強の覬覦するところとなり、明治維新後の日本もまた朝鮮半島と中国を侵略の目標とした、といった表現で始まり、日清戦争や日露戦争、日中戦争の展示につながる。戦争の犠牲者は烈士と呼ばれ、展示は烈士らの活躍が中心となる[高山2019]。

3. 獄中詩における正義の語り

監獄博物館の中心の展示物は監房である。それは、小さな部屋がいくつも並ぶ無機質な空間である。博物館網走監獄では多様なマネキンを用いて当

時の収容者たちの生活を描いている。また、アルカトラズ島では「〇〇の前で立ち止まって下さい。ここが〇〇です」という半ばお節介なオーディオガイドが渡され、見学者はそれに従って歩き進む。何もない監房にはそこで何が起こっていたのかを想像させるような仕掛けが必要なのである。旅



写真 11 西監房

順監獄博物館で用いられている手法は、獄中詩の展示である。監房の廊下にはいくつかの獄中詩のパネルが掲っており、そのうちの一枚は以下のような内容である〔写真 11〕。

満腔の熱血が胸の内に湧いてくる
 侵略された領土を回復する志はまだ実現しない
 党のためならば喜んで命をなげうつ
 燐光は夜な夜な神州を照らす

こうした憂国の詩は、収容された者の正義と、収容した者の不当性を示す効果がある。また、移植墓地の展示における死体を運ぶマネキンは、同胞の無念と日本による支配という屈辱を示す場面となっている。

紀守先は以下のような「満江紅」を残した。

怒りで胸がいっぱいで抑えることができない
 胸に憤りが燃えている
 忌々しい裏切り者、国を売り渡す卑劣な奴
 己の利益のために民族を裏切り、同志を貶め、敵を喜ばせる

廉恥も顧みず、子孫に禍根を残す
 同胞を拒み、祖先に背く
 人命を売り、血銭をつかう
 悪者の僕に甘んじ、抗戦をぶち壊す
 多くの憤りは悪人の肉を食らい、大衆の怒りは卑しい心を剥ぐ
 帝国主義者を殺し尽くすことを誓い、念願を果たそう！

満江紅は93字から成る口語の俗謡であり、宋代の岳飛（1103-1142）による憂国の詞が有名である。それは、「怒りで髪が逆立つ（怒髪衝冠）」という言葉で始まる。岳飛は「盡（精）忠報国」と背中に刻み、精鋭部隊を率いて金軍に対して連戦連勝を重ねるが、その清廉潔癖な人柄ゆえに、南宗の高宗や官僚たちの反感を買う。最後は南宗の宰相・秦檜（1091-1155）の陰謀によって臨安（現、杭州）の大理寺（最高裁判所に相当する）の獄中にて殺害される。死後、関羽に並ぶ神として崇められ、生まれ故郷の河南省湯陰や開封、杭州などの各地に岳飛廟（岳王廟）が建てられる。

やがて、岳飛と満江紅は近代中国の愛国心を象徴するものとなる。辛亥革命前に武装蜂起を起こして殺害された秋瑾（1875-1907）は満江紅を読み、さらに墓を岳飛廟のそばに建ててほしいという遺言を残した。秋瑾の墓は幾度も移動したのち、現在では杭州の岳飛廟の近くに立つ。満州事変以降、岳飛を描いた劇が各地で盛んに演じられ、満江紅は流行歌にもなった。このように満江紅を展示することは、正義を貫いて死んでいった岳飛の悲劇を連想させるのである。現在でも岳飛廟で行われる祭祀にて地元の小学生らが「満江紅」を朗読するイベントが含まれている〔韓敏 2017:19〕。また、2013年放送のTVドラマ『精忠岳飛』（邦題『岳飛伝 -The Last Hero-』）のオープニングでも「満江紅」が歌詞に用いられている。

獄中詩を残したのは、1945年8月16日に処刑された劉逢川（1909-1945）や何漢清（1921-1945）も同様である。以下は劉逢川の詩の一つである。

獄中にて新年を過ごす
 苦しくても常に烈士の気風を称賛する
 英雄の志は死んでも屈することはない
 革命の幟は鮮やかにたなびく

劉逢川は延安抗日軍政大学で学び、何漢清は延安の無線電通訓技術学校を卒業した後、特務としての訓練を受け、情報組を組織して大連に派遣された。彼は1943年から大連恵比須町（現、黄河路）の「太陽堂」という表具店に勤務し、何漢清は大連の船渠工場で働きつつ、収集した日本の政治経済・軍事関連の情報をソ連領事館に流した。2人は1944年12月、関東通信局によって逮捕される。何漢清は劉逢川の姪の劉慶英と結婚したが、工作活動のため身元は隠したままであり、仮名のまま獄中から妻に手紙を送ったことが美談として語られる。

こうした獄中の悲劇や獄中詩が正義の象徴として展示されるのは、植民地監獄の一つの特徴である。政治犯としての収容された革命運動家の多くが知識人であったため、詩を著すことが可能であった。安重根は処刑されるまでの間に『安應七歴史』と『東洋平和論』を執筆し、200ほどの詩を残した。旧第11工場における安重根胸像は両側の壁が獄中書で覆われている〔写真12〕。自叙伝である『安應七歴史』の原稿は長らく行方不明であったが、後に漢文原本の写しが見つかり、1979年に生誕100年を記念して刊行された。

さらに、革命烈士の正義の語りには、罪を認め反省する者の語りも必要である。旅順監獄博物館および撫順戦犯管理所旧址には、戦犯として収容された人々の供述書が展示されている。典獄には最後



写真12 安重根胸像

の田子仁郎（1904-1987）に至るまで、10名が就任した。

1944年5月、典獄に就任した田子は1945年8月15日の日本降伏後、監獄に関するすべての文書を焼却することを命じ、さらに、翌日、劉逢川や何漢清などの5名の政治犯（抗日志士）を殺害した。1945年10月、戦犯として逮捕され、シベリアへ送られた。1950年、撫順戦犯管理所に収容された後、1956年8月、特赦にて帰国した。田子の供述書の写しは旅順監獄博物館と撫順戦犯管理所旧址に展示されている。供述は1930年12月、大連警察署西広場外勤巡査に就任したときから始まり、1944年5月から1945年8月15日までの典獄期間の15の犯罪を供述している。その中の二つは以下の通りである。

2. 私ハ部下ニ命ジテ収容中ノ中国愛国者並ニ平和居民ニ対して腐敗、石ノ混入セリ高粱等ヲ與ヘテキマシタ。而モ彼等ニ強制労働ヲ課シ刑務所内ノ煉瓦、紡績、木工場、鉄工場等ノ15箇工場ニ於テ毎日十時間以上ノ重労働ヲサセマシタ。私が在任中ニ於テ當15箇工場ニ於ケル総利潤ハ53万円以上（日本金ハ此レハ159万珎米ニ相当シマス）アリ之ヲ日本銀行ノ手ヲ経テ日本大蔵省ニ送りマシタ。
4. 当時私ハ偽旅順刑務所長ト法西斯主義ノ毒素ガ濃厚デアル為収容中ノ中国抗日人員ニ対シ毒棘ナ手段ヲ用ヒマシタ。平和居民ニ対シテモ各種類ノ刑罰ヲ虐待ノ手段ヲ実行シマシタ。其為ニ此様ナ多数ノ人が死亡シタノデアリマス。例ヘバ1945年春私ハ部下ニ命ジテ中国抗日人員柳相根ヲ独房ニ入レ食糧ヲ減シ病氣トナシ其ノ上故意ニ治療セス其為ニ柳相根ヲ早期ニ死ニ致ラセマシタ。私ハ其百余名ノ人々ニ対シ其ノ様ナ毒棘ナ方法又ハ各種類ノ刑罰ヲ以テ虐待シ遂ニ死亡サセタノデアリシテ私ハ之ニ対シ全責任ヲ負フツモリデアリマス。

撫順戦犯管理所旧址の展示施設「改造日本戦犯陳列館」の前文には、「かつて“鬼”であった人間が、侵略戦争に反対し、世界平和を推進する新しい

人間へと再生し、ここに世界の戦犯管理の歴史における“撫順の奇跡”を創りだした」と記される。陳列館は戦犯らが学習し、労働する様子、さらに、帰国者が結成した「中国帰還者連絡会」（通称、中帰連）の活動を展示している。彼らは撫順戦犯管理所に送られる前、1956年の特別軍事法廷の裁きを経ている。その様子は、瀋陽の「九・一八」歴史博物館にジオラマとして展示され〔写真13〕、以下のような説明が掲げられている。



写真 13 秦檜像

1956年7月1日から20日まで、中華人民共和国最高人民法院特別軍事法廷が瀋陽において開廷され、武部六蔵や古海忠之など28名の日本戦犯を審理し、戦争の犯罪者はついに歴史の法廷に引き出された。アヘン戦争以来、中国人民は初めて自分の土地で独自に侵略者を裁いたのである。

特別軍事法廷では45名の戦犯が判決を受けた。例えば、「東北人民を直接蹂躪した元凶の一人」とされる武部六蔵（元、満州国国務院総務庁長官）と華北にて燼滅作戦を主導した鈴木啓久（元、陸軍第177師団中將師団長）は懲役20年、東北の大量の石炭や鉄などを略奪し戦争を拡大させた古海忠之（元、満州国国務院総務庁次官）は懲役18年であった。

このように裁かれる悪徳者の姿は、杭州の岳飛廟における跪く秦



写真 14 特別軍事法廷

檜の像を思い起こさせる [写真 14]。貶められた正義は必ず裁きを受けるという語りが存在するのである。

おわりに

マイケル・サンデルの正義論は日本だけではなく、中国でも大きな影響力を持ち、『サンデル教授、中国哲学に会う』が刊行された。本書では、儒教的な正義はサンデルの正義論とどのように異なるのか、もしくは、共通するのかという議論が交わされている。「儒教における美德の正義は…有徳な者に報い、悪徳な者を罰するのではなく、悪徳な者がみずからの悪徳を克服し、有徳な者になれるように手助けすべき」[黄勇 2019:73] であるという。この指摘は、愛国主義教育基地としての植民地監獄博物館における正義の語りにも当てはまる。植民地監獄博物館の正義は、不当な権力に屈しない烈士の姿と、不当の権力を駆使した悪徳な者を矯正する共産党の姿を通して語られる。

こうした語りにおける正義は、機会や結果の平等という意味の正義(justice)というよりも、「なすべきこと」(do the right thing)という儒教的な道義を指す。儒教は、五四運動の「打倒孔家店」(孔子を根底から批判する)や文化大革命期の「批林批孔」(孔子と林彪を批判する)運動に見られるように、近代化の過程で徹底して批判に曝された。それは、中国が列強支配を受けるようになった理由は、儒教における封建的な価値観や軍事を軽視する伝統にあり、儒教文化と社会主義の間には埋めがたい溝が存在すると考えられたためである [林 1997]。ただし近代化の中で繰り返された儒教批判は、慣例や制度という表層に留まり宗教性という深層にまでは至らなかった [加地 1990]。そのため、植民地監獄博物館では正義の語りと社会主義イデオロギーは矛盾しないものとして共存している。

監獄とは人を拘束する施設であるゆえに、使われなくなった後には監房以外にはほとんど何も残らない。何もない空間にかつての暴力の横行を示すた

めにマネキンを用いて拷問の場面を生々しく再現するという方法もあるが、それでは俗悪さを殊更に強調してしまい、正義の語りを消してしまう可能性がある。犠牲者の崇高な志を示すには、その人物の生前の写真、そして遺書や獄中詩などが適している。無機質的な監獄の空間に掲げられた遺書や獄中詩は、見る者に正義を訴えかける効果を持っているのである。

注

本稿では、懲役監獄（一般的な刑務所）・未決監獄（代用監獄）・債務監獄・女子監獄・軍事監獄・島嶼監獄などの総称として監獄という言葉を用いる。1922年、司法省監獄局が行刑局と改名し、監獄は刑務所、監房は居房と改称された。

参考文献

麻田雅文

2012『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896-1935』名古屋大学出版会

井出明

2018『ダークツーリズム：悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎新書

黄勇

2019「美徳としての正義、美徳に基づく正義、美徳の正義－マイケル・サンデルの正義の概念に対する儒教的修正」マイケル・サンデル&ポール・ダンブロージョ（編著）『サンデル教授、中国哲学に会う』早川書房、48-85

加地伸行

1990『儒教とは何か』中公新書

加藤久子

2012「負の文化遺産のツーリズム：〈アウシュヴィッツ〉への旅」山中弘（編）『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』世界思想社、236-253

郭富純（編）

2003『旅順日俄監獄実録』吉林人民出版社

韓敏

2017「岳飛の社会記憶とその資源化－杭州岳王廟を中心に」『国立民族学博物館調査報告』142、9-29

重松一義

1985『日本の監獄史』雄山閣出版

2005『世界監獄事典』柏書房

高村直助

1982『近代日本綿業と中国』歴史学選書

高山陽子

2012「聖地の記憶：旅順を事例に」『亜細亜大学国際関係紀要』21(1/2)、137-166

2013「監獄の観光化：中国の撫順監獄と青島監獄の事例から」『東南アジア諸国における持続的成長のための諸条』（アジア研究所・アジア研究シリーズ No.82）、31-56

2014「英雄の表象—中国の烈士陵園を中心に」『地域研究』14(2)、43-58

2016「文化資源としての戦跡：旅順の事例を中心に」塚田誠之（編）『民族文化資源とポリティクス：中国南部地域の分析から』風響社、377-402

2019「革命の歴史の資源化：紅色文化における解放の語りと展示の分析を中心に」長谷川清・河合洋尚（編）『資源化される「歴史」：中国南部諸民族の分析から』風響社、363-388

張志成

2015「国際情報組織在大連地区的抗日活動」『大連近代史研究』2015年00期、22-32

林嘉言

1997『中国近代政治と儒教文化』東方書店

フーコー、ミッシェル

1977『監獄の誕生 監視と処罰』新潮社

楊習梅（編）

2009『中国監獄史』中国民主法制出版社

Dalton, Derek

2015 *Dark Tourism and Crime*. Routledge.

Strange, Carolyn and Michael Kempa

2003 “Shade of Dark Tourism: Alcatraz and Robben Island.” *Annals of Tourism Research*, 30 (2) , 386-340

Wilson, Jacqueline Z.

2008 *Prison: Cultural Memory and Dark Tourism*. Peter Lang.

Zinoman, Peter

2000 “Colonial Prisons and Anti-Colonial Resistance in French Indochina: The Thai Nguyen Rebellion, 1917” *Modern Asian Studies*, 34 (1), pp. 57-98

新聞

「大連に暗躍7年、抗日謀略の放火 一味百余名を検挙」『東京朝日新聞』1941

年 2 月 6 日

その他

財団法人忠霊顕彰会

1939 『満洲戦績巡禮』

関東局編

1974 (1936) 『関東局施政 30 年史』 原書房

『安重根の生と国を愛するストーリー：獄中自叙伝』（社）安重根義士崇慕會安重根義士紀念館、2013 年

1941 『ポケット満洲国要覧 康德八年版』

ウェブサイト

旅順監獄博物館ウェブサイト

<http://www.lsprison.com/webs/index.asp>（最終閲覧日 2019 年 4 月 7 日）

